かさまのれきし

第60回

慈眼院の鰐口

隠沢の朝観音
（一番祈祷を受けようと先を急ぐ信者たち）

隠沢観音の鰐口

笠間市泉に祀られる隠沢観音の正式名称は、真言宗豊山派嶽南山慈眼院清滝寺（以下、慈眼院と略）です。現在、寺院は消滅し、観音堂と本尊である室町時代後半に造られた十一面観音立像（市指定文化財）のみが残っています。

観音堂は、国道三五五号を石岡方面へ進み、市野谷の隠沢観音堂入口を右折し直進した所にあります。

慈眼院は愛宕山の南、嶽南山中腹の堂平に創建されましたが、江戸時代前半の延宝元年（一六七三）、この地の領主である土浦藩主土屋政直により現在地に移されました。

慈眼院の鰐口（市指定文化財）は、現在笠間市郷土資料館に保管されています。鰐口とは、神社の拝殿や寺院の堂前軒下に掛けられた青銅製の「法楽器」の一種であり、参拝の折、鰐口に添って垂れ下がる綱を振って打ち鳴らすとガランガランと鈍い音がします。この鰐口には銘文がみられ、中央に種子「サ」（＝観音菩薩を意味する）、右側に「常州完戸庄泉郷嶽南澤観音堂之鰐口」、左側に「貞和五年己丑三月日　別當僧裕尊」とあり、この銘文から、貞和五年（一三四九）、慈眼院住職の裕尊の代にこの鰐口が鋳造され、この地が常陸国の宍戸庄という荘園の中の泉郷と呼ばれていたことがわかります。これにより、この地域の中世的景観をうかがうことができ、また人々の観音信仰の様子を知ることができます。

この鰐口は埼玉県与野市（現在のさいたま市）教育委員会が、市内にある長伝寺（浄土宗）を調査した際に発見され、「嶽南澤観音堂」の刻銘から、本来の持主は慈眼院であることが判明しました。長伝寺の好意により昭和六十二年（一九八七）に慈眼院に返却されました。

隠沢観音本尊は近年まで安産・子育ての観音として、近郷近在の女性の信仰を集め、毎月十日の縁日には参拝者が月参りに訪れたといわれています。特に七月十日は「隠沢の朝観音」で賑わいました。当日は「四万六千日」という年行事が催され、この日にお参りすると四万六千日分の功徳があるとされ、さらに「一番祈祷はご利益が倍になる」といわれました。観音堂ではこの日に何度か祈祷が催され、十日の朝最初の祈祷に臨むことで、より多くの功徳とご利益を得ようとする気持ちが「隠沢の朝観音」の言葉には秘められているかと思われます。

（市史研究員　萩野谷 洋子）

問　生涯学習課　内線382